

## 社会調査に何ができるか

——山室建徳「市民の科学か、国民の物語か」に就いて——

松尾 浩一郎

研究とは孤独との戦いでもある。世間や学界で既に関心を集めている問題をなぞるだけでは、そこに新しい何かを付け加えることは難しい。であるから、それまで注目されることのなかったテーマに取り組むこと、あるいは従来とは異なるアプローチで研究をすることなどが求められる。しかしだからといって、類例のない研究を試みさえすれば良いわけでもない。他とは異なる自分自身の議論をしつつも、多くの人々からの関心を得て議論の輪を広げていくことができるだろうか。研究者は、誰にも見向きもされないかもしれないという不安と戦いつつ、誰とも違う自分だけの世界を構築しなければならないわけである。

このたび幸いにも機会を得て、拙著『日本において都市社会学はどう形成されてきたか——社会調査史で読み解く学問の誕生』（ミネルヴァ書房、2015年）を刊行することができた。19世紀末から1960年代までに行われた様々な都市社会調査を題材として、その展開のなかから「都市社会学」というひとつの学問領域が形成されていった過程を描き出そうとした小著である。もともとは2013年に提出した博士学位論文であり、それに若干の手を加えて単行本化したものである。

狭い世界に閉じ込められがちな学位論文をこのように世に送り出すことができたのは、率直に言って大変嬉しいことである。しかしこの出版は、そうした嬉しさと変わらないぐらい大きな不安を抱えながらのものでもあった。果たしてこの本を読む人はいるのだろうか。筆者として提起したかった議論の文脈を理解しフォローしてくれる人はいるのだろうか。公刊からしばらくが経ちある程度の反響を得ることができた今でも、この不安は完全には消えない。

このような不安を拭えないのは、本質的には筆者の力量不足によるものであるが、それとは別の理由もある。というのも、本書につながった一連の研究は、もっぱら「社会調査史」という一般の認知を充分には得られていないであろう分野を意識してなされてきたものだからである。

社会調査史研究とは、ごく簡単に切り詰めて表現するならば、社会調査活動という「出来事」がどのように行われてきたのかを跡付け、その意味を社会史や学史との関わりの中で追究していこうとするものである。近年になって次第に注目を受けるようになりつつはあるが、少なくとも筆者がこの研究に着手した時点では、日本中で数えても専門研究者は十人にも満たない、きわめて小さく目立たない研究分野であった。

拙著はその成り立ちからいっても、根底にある問題意識からいっても、社会調査史研究であることにそもそもの存立基盤がある。そうであるが故に、良くも悪くも、世間や学界の一般的な関心とはかなり離れたところでの議論を試みるということとなった。

出版社も不安を感じたようである。実はこの書の題名は、当初構想していた表題とはまったく違うものとなっている。というのも、「社会調査史」を掲げた書物は売れないと判断されたようで、担当者や編集部のあいだで二転三転し、最終的には筆者の与り知らぬところで「都市社会学」を前面に押し出した題名となっていた。

確かに都市社会学の歴史を描いていることは間違いではないから、都市社会学史の議論として受け取られることも故なしとしない。しかし、1960年代までで記述を終えている本書は、その後さまざまな展開を経て、まったく異なる姿へと変貌を遂げた今日の都市社会学から見れば、奇妙な学史と映るに違いない。（この点については、玉野和志氏による評「都市的な現実をとらえる方法としての社会調査のあり方——学説史として網羅的に知るための手引き」『図書新聞』（3215号）でも論じられている。）

なにやら冒頭から繰り言めいた言辞を連ねてしまったが、ともかくこのような不安を抱えたままでの出版からしばらく経ったある日、評者の山室建徳氏より心のこもったコメントが届けられた。そのコメントは、単なる学史記述を目指したのではなく、社会調査活動に注目することで社会を研究しようとする営み自体を問い直すことを志した拙著のねらいを、正面から受け止めてくださるものであった。著者としてはこれ以上嬉しいことはない。山室氏にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

山室氏はいくつかの問題を提起されている。なかでも、歴史学の方法と社会

学の方法の類似と相違に着目して、いわゆる社会科学と人文科学の射程について議論されていることに、筆者としてはとくに関心を惹かれるものがあった。科学主義の限界、歴史記述における物語性、市民と国民、社会調査の可能性などといったその他の話題も、いずれも「歴史学と社会学の方法」という論点に関わってくるだろう。そこでこれから、とくに社会学の方法——現在のそれと拙著が対象とした時代のそれは大きく異なっているが——の特徴を手掛かりに、人間や社会を調査し研究することの可能性や意味などについて一考察を試みることで、山室氏の問題提起への応答に代えることとしたい。

## 1. 社会学の方法

社会学には多様な顔がある。社会学の名の下で無数の研究が行われているが、それらのうちかなりのものは、異なる学問分野において発表されたとしても違和感がないのではないだろうか。人類学、民俗学、心理学、地理学、政治学、経済学、法学、歴史学、教育学、倫理学、哲学、建築学、都市計画、マーケティング、ジャーナリズムなど。さまざまな隣接分野のあいだで社会学はアメーバのように存在している。その学問的性格は、曖昧さや不明瞭さの上に成り立っている。

社会学を社会学につなぎとめるものは何か。その重要なかすがいとして、人と社会を「実証的」に研究できるのだというアイデンティティと、その技法であるところの社会調査の存在を挙げることができる。もちろん社会調査を自分の研究手法としない社会学者も少なからずいる。しかし社会学は全体として、世間からの一定の認知と誤解も含めた信用を受けてきた社会調査を、みずからの掌中に収めてきた。このことは社会学の繁栄と成功——それは必ずしもただちに研究内容の豊かさを意味するものではない——に大きく寄与してきたといえるだろう。

社会調査は経験的研究のための技術であるが、果たしてそれは科学だといえるだろうか。答えはおそらく否であろう。少なくとも、物理学に代表される近代自然科学の論理と方法に近づこうとすることを科学だとするならば、社会調査は科学たりえないといえる。また、今日の社会調査をめぐる動向をみると、科学になろうと目指すことさえほとんど止めようとしているものも目立ってい

る。

社会調査の歴史を振り返ってみると、1960年代前後を頂点として、科学主義へ全面的に傾斜していく時期が確かにあった。そこでは社会現象の中から法則性を見出すことが目指された。しかし拙著で検討したように、科学主義は社会調査の生産性を表面的には高めたものの、人間社会の研究には必ずしも適さなかったため、社会学研究のかたち自体をいびつなものにしていくという「失敗」をもたらした。

拙著は1960年代で記述を終わらせているが、その後1970年代以降の社会調査は、このような「失敗」を踏まえて、科学でありたいとする欲望を捨てる方向へと舵を切っている。なかには変わらず科学主義の追求を堅持する系譜もあるが、それとは別に、自然主義的な潮流が大きな勢力を作っている。自然主義的な立場で行われる社会調査は、実験室内のように諸条件を統制することを理想とするのではなく、生身の人間が織りなす現実の社会現象の舞台となっている様々なコンテクスト——土地、文化、歴史、法、政治、経済、そして人間関係の網の目など——にも積極的に目を向けることを特徴とする。エスノグラフィやライフヒストリー、ライフストーリーなどといった、いわゆる質的調査がおおむねそれにあたる。

こうしてみると、評者が提示したような歴史学と社会学の相違、つまり、科学的方法に依拠する度合いの違いは、それほど大きなものでないといえるのかもしれない。もちろん主な関心が過去に向けられているか現在に向けられているかが、両者を分かつ大きな分水嶺にはなっているが、それもまた相対的なものでしかない。社会調査は「現在」の社会現象を扱うにしても、それをデータとして捉え直していく過程を経るうちに、「現在」であったはずのものも「過去」になってしまうのは、まさに評者の指摘するとおりである。

思うに、歴史学と社会学の方法におけるより本質的な違いは、データ収集——ここでは研究資料一般を総称してデータと呼ぶこととしたい——のあり方に所在しているのではないだろうか。

門外漢の誤解曲解であったらご寛恕願いたいですが、歴史学の場合は、研究対象に関する情報が含まれた文書があらかじめ旧家の蔵や何らかのアーカイブの中などに存在していて、そこから研究者が一定の視角にもとづいて選択的に採り

上げたものが「史料」となるのだと理解している。このデータ収集の過程においては、研究者が研究対象そのものに関わりあう機会は、基本的にはない。また、研究者の関与がデータの内容や質を変えることも原則的にはないだろうし、そうあってはならないだろう。

他方で社会学における社会調査の場合は、データ収集の場において、研究対象に積極的に関与していく。統計分析にかける質問紙調査であっても、個人の語りに耳を傾けるインタビュー調査であっても、このことは変わらない。研究者が研究対象に向けて問いを發し、それに対する反応として、初めてデータが生まれるのである。

筆者自身もさまざまな種類の社会調査を行ったことがあるが、その乏しい経験からの実感としても、自分で対象に働きかけてデータを「生産」しているという表現は腑に落ちる。よりナイーブに言うならば、調査者と被調査者によってデータは共同構築される。そこでは、条件を統制して客観的に測定するという科学的発想は、かなり後景に退いている。

研究者の関与によって生まれる社会調査のデータは、科学研究で用いられるデータとは成り立ちからして異質であり、また、歴史研究における史料ともかなり異なった性格を持っているともいえる。

評者は「社会調査の可能性」のひとつとして、史料集の作成と歴史分析が明確に区別されている歴史学の作法を引きながら、データ収集とデータ分析の分離について述べている。そのような試みは近年少しづつ行われるようになりつつあり、社会学では「(社会調査データの)二次分析」と呼ばれている。とはいえ、二次分析もそれほど広まっていないことも事実である。おそらくその理由のひとつは、社会調査における対象への関与という性質があるのではないかと考えている。調査者の関与によってデータが生産されるならば、やはり他人が収集したデータセットは使いにくくなるだろうし、可能ならば自身の手でデータ収集をしたくなるのは当然のことであろう。

データを「生産」することは、社会調査の、そしてそれにもとづく社会学の、重要な特徴となっている。それは長所にもなるし、短所にもなる。

研究者が研究対象に関与することで生じるデータの「偏り」「歪み」は否定できない。意図的であれ非意図的であれ、特定の方向へと回答を誘導する可能

性は大きい。こうした問題がインタビュー調査において顕著に表れることは容易に了解されるだろう。多くの語り手はしばしば聞き手の期待を満たすように語る。それは時には「嘘」を話すことにつながっていく。質問紙調査であっても事情は変わらない。むしろ「科学的」だという装いに包まれている質問紙調査こそ、この問題は根深いものとなる。何人たりとも回答の選択肢に存在しない意見は表明できない。質問文の文言をごくわずかに変えるだけで調査結果が大きく異なってくることも、数々の方法論研究によって明らかにされている。科学的ではないだけでなく、仮に史料批判の態度でデータを吟味するならば、社会調査は学問研究の方法としては成り立たないだろう。

上述したような問題点は、逆に、社会調査ならではの強みと表裏一体となってもいる。研究対象にじかに接して、彼ら彼女らがふだん自覚的には意識していないようなことについても、さまざまな角度から深く問いかけていくことができる。とりわけ、研究者と研究対象者とがお互いに共感しあい、尊重しあえるような関係性が築けた場合のインタビュー調査では、信じられないほど深く濃密で繊細な成果が得られることもあると、筆者は経験的に知っている。（たとえば小倉康嗣著『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』などはそうした優れた作品のひとつである）

ただいづれにせよ、社会調査にもとづく研究の場合、調査がどのように行われたのかが重大な意味を持っていることは明らかであろう。研究者はどのような問いを、どのような技術や手段を使って、どのような意図とともに投げかけたのか。それはどのように受け止められたか。調査対象者とはどのような関係性にあったのか。たとえば権力関係や利害関係の有無はどうであったか。調査プロジェクトを支援したりそれに対抗したりする人や組織はあったか。その他に調査過程にバイアスとして影響する要因はなかったか。こうした一連の問題に注意を向けることは、社会調査を行う者はもちろんのこと、社会調査の結果や調査にもとづく研究の読み手にとっても、欠かすことのできない課題になっていると筆者は考えている。

こうした課題に答えようとする試みのひとつとして、拙著のような社会調査史研究を位置づけることができる。調査の行われ方は、個々の研究の成果を根本から左右しうるのはもちろん、その集合である学問の性質をも変えていくこ



ともある。とりわけ研究者と研究対象者の関係性という「ゆらぎ」の上に成り立っている社会学の場合、調査の場を反省的に検討していくことは、学の本質にも関わる重要性を持っていることであろう。

## 2. 社会学の「つまらなさ」が意味するもの

拙著が議論の俎上に載せたいいくつかの都市社会学の調査研究事例に対して、評者は「分析結果がおもしろみを欠く」「特に意外性はなく、「だからどうした」と突っ込みたくなるような内容」だと指摘している。この評価には基本的に同意する。しかしその意外性のなさ、つまらなさが何を意味しているかについては、改めて論じてみるに値すると思われる。

つまらなさの理由はいくつかある。まず単純なことからいえば、拙著で取り上げた調査事例のいくつかは、本当に「つまらない」ものであったからである。とくに日本における都市社会学の形成過程においては、異なる方向を見据えた多様な研究の萌芽があった中で、結果として「つまらない」研究が権威あるものとして生き残っていった。なぜ「つまらない」ものが生き残ったのか。拙著はこうした問いに、社会調査活動をめぐる諸々の力学とその変化という要因を鍵として、答えを出そうと試みたわけである。

しかしこれとは別の問題もある。「つまらない」と評価するのは誰なのだろうか。個人の性格に起因する好き嫌いを無視するとしても、評価者やそれを取りまく社会があらかじめ持っている知識や常識や問題関心との関数として「おもしろい」「つまらない」といった評価は下されるはずである。当然のことながら、時代や文化、国などによって、そらの条件は変わってくることだろう。

1960年代を中心とした戦後日本の都市社会学に「つまらない」研究が少なからず見られるというのは、おそらく正しい。なかには、新しい社会調査のテクニックに傾倒するあまり、それに絡め取られ、都市や社会に対する理解を豊かにしていこうとする動機が薄らいでいるように見える研究も確かにあるからである。

しかしなかには、その研究が行われた当時においては、重要な意味を持ち、多くの人々の興味を集めていたものも含まれているはずである。

ここからは拙著で言及した範囲を超えて社会学一般を念頭に置いた議論にな

るが、現在のわれわれにとっては「つまらない」研究であったとしても、それが行われた当時においてはそうではなかったケースは、案外多いのではないだろうか。というのも、社会学はその社会に存在している暗黙の「常識」を問い直すという性質を持っているからである。

社会を研究しようとする者は、一般に広く共有されている「常識」を当たり前の前提として受け入れることはせず、社会調査などの武器を使ってそれを再検討していく。結果として、時には「常識」とは相容れない議論を世に問うこともある。こうした研究結果のなかには、「非常識」と見なされ世間から受け入れられないものもあれば、まったく無視されるものもある。しかし優れた社会学研究は、それまでの「常識」に修正を促したり、何かを付け加えたり、あるいはそれを覆す力を持っている。そして最も優れた社会学研究は、発表当初は新規性とインパクト——「おもしろさ」と言い換えても良い——を持っていたとしても、じきにそれが新しい「常識」となっていく、その後の社会の一部を構成するものとなっていく。後に振り返ってみるならば、その研究が主張していることは、誰もが「常識」として知っている「あたりまえ」で「つまらない」ものとなるのである。

比較的近年に起こった社会学が「常識」を生み出した例として、少子化・晩婚化・非婚化といった一連の現象が進行する理由の解釈の仕方を挙げるができる。

1989年に起こった「1.57ショック」を主な契機として、出生率の低下やその原因としての晩婚化に世間の関心が集まるようになった。さらにその規定因としての「女性の社会進出」が争点化されていった。論壇でも世論でも大勢の論調は、出産する性としての女性に、出生・出産に関する諸問題の責任を求めることを当然視するものであった。つまり晩婚化も少子化も「女性の問題」とされていた。

しかし1990年代の後半には、社会学やその周辺では、晩婚化や少子化を女性だけの問題と位置付けることを確証を持って否定できるだけの知見が出揃っていた。少なくとも社会学界においては、逆に「晩婚化・非婚化は主として男性の問題」と見なすべきであることが常識になっていた。少子化については、これほどまで明快に断じることはできないながらも、女性だけの問題でないこと



は合意されるようになっていた。

少子化・晩婚化・非婚化に対するこうした視座の転換を根拠づけたのは社会調査であった。未婚率は男性の収入と強く逆相関する。一般的にいて人間や社会現象を対象とした統計分析は、自然現象の分析に比べて、あやふやな結果しか出てこない。そのため、様々な統計量を解釈するにあたっては、自然科学では棄却されるのが当然視される程度の小さな値であっても、社会調査においては有意とみなすことも普通に行われている。しかし未婚率と男性の収入の関連は、どのような角度から分析してみても、社会現象としては桁違いに強力かつ明快なものであった。

ちょうど 1990 年代は、全国規模で進行した経済状況や労働市場の変動を背景にして、子育て適齢期にある若い男女のうち、十分な収入を安定して得ることがとくに期待されてきた男性に、無業者・不安定雇用者・低所得者が増加していた。まさにそれが、人を結婚から遠ざからしめた決定因だったのである。そして、日本文化においては未婚カップルが子どもを産むことは忌避されてきたので、結婚しないことは当然出生率の低下をもたらすのである。

筆者の個人的な印象と記憶を辿って論じることを許していただくならば、世紀が転換したゼロ年代になっても、しばらくは女性原因説が世間の常識となっていた。社会学界での常識、つまり男性原因説は、ほとんど顧慮されることはなかったように思う。筆者は家族研究はまったくの専門外だが、こうした状況を非常にもどかしく感じ、講義や講演をする機会には、必ずこの男性原因説を話題にして、少しでも世間に伝えようとしていたことが思い出される。

ところが現在では、いつのまにか男性原因説が「常識」として世間を覆っている。ニート、フリーター、終身雇用の終焉、草食男子、結婚できない男……。家族を養う義務を負おうとしない気楽な性としての女を妬まし気に見る男の視線さえ、今日では珍しくなくなっている。おそらくこの話題を長々と書き連ねてきた本稿も、ほとんどの読者は「当たり前」で「つまらない」ものと感じていることだろう。世間の「常識」は完全に転換した。こうした転換のきっかけを作ったのは、ある新聞がこのデータに目をつけて重点的に報道したことだったと、あやふやではあるが記憶している。

いずれにせよ、優れた社会学の成果は、文字通りの「常識」として、世間一

般の多くの人の日常の中に、無意識的に組み込まれていくのである。一度そう  
なってしまうと、もはや世間は、最初に研究成果として提示した社会学者のこ  
とは憶えていない。個性を失った知識である「常識」には、固有の提唱者も発  
見者もないのである。これは社会学にとって名誉なことでもあるが、自身の  
プレゼンスが高まらない悩ましい構造的問題でもある。

常識を生産する社会学は、後から振り返って見て「つまらない」のも当然で  
あるし、むしろ振り返ろうとさえされないのが正しいといえるのかもしれない。  
たとえば「限界集落」という語は誰でも知っているだろうし、地域経済学科で  
の学びの基礎中の基礎にもなっている。しかしそれは、農村調査に取り組んだ  
ある一人の社会学者が、自身の調査を踏まえて提唱したオリジナルな概念なの  
である。おそらくほとんどの人は、この「限界集落」の提唱者の名前を知らない  
であろう。また、この研究者が展開した議論を「限界集落」の原典として深く  
検討しようとする人も少ないであろう。社会学とはそのような学問なのであ  
る。

### 3. 社会記述と物語性

これまで研究の「つまらなさ」について、いわゆる新規性の有無に着目して  
論じてきたが、もちろんそれだけが「つまらなさ」——あるいはその対概念で  
ある「おもしろさ」を決めるのではない。さまざまな要素が「おもしろさ」に  
関わってくる。なかでも物語性の問題、つまり、個々の知見がまとまった叙述  
へと組み立てられているさまの巧拙、その叙述がどれほどの説得力と魅力を湛  
えているかといった問題は、「おもしろさ」の重要な部分を構成しているとい  
えるだろう。

近年では社会学においても「物語」はキーワードのひとつとなっている。個  
人のライフストーリーや、ナラティブに対する関心が高まっている。それらは  
社会調査が自然主義的な方法へと傾斜している動向とも呼応している。

社会学で注目されている物語とは、研究対象となる当事者が、自分自身をめ  
ぐって築き上げてきた記憶や評価や説明や願望などの体系のことだといえる。  
社会学にもさまざまな立場があり一概には言い切れないが、物語を組み立てる  
のは研究者ではなく、研究対象者自身であるという意識は強い。

評者が「世界は混沌としているが、人間はそこに物語を見出して生きている」と指摘する通り、社会の一員である人々は、みな自分の物語を、あるいは自分の視点から見た社会の物語を持っている。そうした物語を引き出すことを強く意識した社会調査が盛んに行われるようになっていく。

物語は表現としてきわめて強力なものである。オーディエンスにとっても、よく構成された物語は大変に魅力あるものとなる。しかし、混沌とした世界の中から、筋の通った物語を見出すのは難しい。大胆なアレンジが許容される文芸などであればまだしも、信頼性と妥当性のあるデータにもとづいた上で、それと矛盾がなく、読み手にとっても理解しやすい筋を叙述することは至難の課題である。

質的社会調査による社会学と非常に近いものに民俗学がある。民俗学者の宮本常一による聞き書きの名作「土佐源氏」（宮本『忘れられた日本人』に収録）は、社会調査と物語性の問題を浮き彫りにする象徴的事例のひとつとなるだろう。宮本のインタビューに答える一老人の口から溢れ出た言葉は、話者個人の人生とそれをとりまく社会的なコンテクストを表現する豊かな物語へと昇華している。しかしこの作品は、事実立脚している部分も当然あるものの、そこで叙述された物語の内容はほとんど宮本の創作に近いことが、後に明らかにされるに至っている。美しく物語ることと、データに根拠づけられた議論をすることは、しばしば容易には両立しない。そのようななかで、「土佐源氏」は両者のバランスをとることを捨てて、あえて前者に傾くことで書かれている。その当否はどう判断すべきだろうか。

統計的な量的調査でも物語性の問題は無関係ではない。数量的なデータに解釈を加えて理解しようとするとき、あるいは成果をまとめて発表し他者に伝えようとするとき、物語化への欲求が生じることになる。しかし、統計的に表現された知見やリアリティは、言語的な叙述に翻訳してしまうと、その「おもしろさ」は充分には再現できないことが多い。勢い、過度の単純化や無理な解釈、その他諸々のバイアスが混入してしまう。拙著で扱った事例に、奥井復太郎と近江哲男の鎌倉調査がまったく異なる鎌倉像を描いたというものがあつたが、それは量的調査をもとにした物語化に難しい問題が含まれていることを表しているといえるだろう。

映画『羅生門』が印象的に表現したとおり、同じ状況であっても、そこからまったく異なる複数の物語が生じうる。社会の研究においても、広い視野を持った研究者が超越的な立場から物語を叙述することもできるし、渦中にある当事者の視点から紡がれた当事者自身の物語をそのまま受容することもできる。それぞれ長短があるなかで、今日の社会学はおおむね後者を志向している。

当事者による物語は、得てして主観的であって、いわゆる客観的事実と矛盾することもありうるだろう。ここでは原爆被爆者の証言を例にあげることができる。1945年8月のある日の体験から今日までの人生を証言する彼ら彼女らの物語は、聴く者を強く揺さぶる力を持っている。しかしそこで語られた物語の内容は、激烈な体験すべてを細部にわたって客観的かつ正確に叙述するものではない可能性が多分にある。極端な例として、群を抜いて感動的な物語を語っていた某氏の被爆証言がほぼすべて「幻」——あるいは「捏造」——だったということさえある（伊藤明彦『未来からの遺言』）。このような問題構造があることは承知しつつも、多くの社会学者は、最終的には当事者の物語に最も大きな正統性を認めようとするのである。

当事者の物語を優先する方法的立場は、拙著の議論においてもそのまま踏襲されている。過去の調査研究を今日の視点から振り返り評価するのではなく、可能な限りその調査研究が行われたコンテキストを共有し、その研究が描き出そうとした物語を理解した上で議論することを試みている。

ところで評者は「市民か国民か」と問題提起し、拙著が「市民」の物語に依拠していることに疑問を投げかけている。しかし「市民」をめぐる筆者の立場や意図は、評者が論じるような文脈とはやや異なる次元にあるように思う。というのも、拙著がたびたび「市民」という語を使うのは、検討対象とした1950年代から60年代の都市社会学者たちが、自身の調査研究を意味づけるキーワードに「市民」を据えていたからである。「市民」という語を使い、「市民」を主人公として都市社会を語ることは、まさに当事者の物語なのである。こうした物語が存在し、それが社会調査史や都市社会学の展開に大きな意味を持っていたのは、ひとつの歴史的社会的事実である。社会調査史研究においても、当事者の物語を理解することから議論を進めていきたいと筆者は考えている。

「市民か国民か」という問いについては、もう少し贅言を弄させていただき

たい。評者は「市民」という言葉の意味を広げたくないと論じている。おそらくマルクス主義やその周辺で *bourgeois* の訳語として「市民」に特有の意味を込められていったことが念頭にあるのではないだろうかと拝察している。このような文脈で戦後日本において多用されていた「市民」概念についての評価はここではさて置く。言語が世界を構成すること、その意味で我が国の言語である日本語が重要な存在であることについては、筆者も同意する。しかし仮に、日本語の「市民」と外来語や外来の意味を軽々しく結びつけるべきでないという意味がそこに含まれているのであれば——これは筆者の穿ち過ぎかもしれないが——首肯しかねる。異なる言語間での完全な翻訳は不可能であるにしても、無理を承知で翻訳を試み別の世界を理解しようと努力することは、歴史を学ぶことと同じように、我々の思考を鍛え、世界観を豊かにしてくれるものと信じたい。そもそも日本語の「市民」は、福澤諭吉が *citizen* の訳語として使い始めた事実上の造語だと理解している。そして言うまでもなく英語の *citizen* は、日本語の「国民」とかなり重なり合う意味を持っている。もちろん英語の用法が正しく日本語が間違っているというわけではない。異なる言語世界で、異なる世界の概念化がなされているわけであるから、そうした様々な世界観を突き合わせることで、より我々は自他の理解を深めていけるのではないかと考えるのである。

これまで思いつくがままに書き連ねてきたが、十分に議論を展開できたとは到底言えないものになってしまったようである。また、評者から頂いたさまざまな論点のうち、かなりのものが手付かずのまま残されたままとなってしまった。このようなリプライしかできなかったことをお詫びしたい。

ここしばらくは社会調査史研究にこだわってきたが、出版をもってひとつの区切りとして、今後はみずからフィールドに出て調査を行うことに重点を移していこうと考えている。これまでの社会調査には、長く豊かな、そして数多くの失敗が重ねられてきた歴史があった。それを批判的に継承しつつ、今やるべき調査、自分にしかできない調査に取り組む心づもりでいる。そしてそうすることで、都市社会調査の新たな展望を示すことができたらと願っている。

